

富士秋霽

——吉田茂翁の志操——

照 沼 好 文

大磯・西小磯の旧吉田茂邸が全焼（平成三年三月三日朝）したというニュースを聞いて、早くも二年余の歳月が流れた。

西小磯の旧吉田邸内の七賢堂へ通ずる参道を途中から折れて、松林のなかの小道を丘の上に登っていくと、相模湾を眺望し、西に富士山を遠望できる「見晴し台」に辿り着く。この一角に吉田翁の銅像が建っているが、丁度旧吉田邸の南側に位置する。吉田翁は生前、ここを好んで散策したという。

この辺一帯の敷地約一万坪（三三、〇〇〇平方メートル）は、吉田翁の養父健三氏が明治十七年に、眼前に太平洋の大海原、松林を渡って聞える松籟、それに富士山の遠望——こうした風景と環境とを好んで別荘を営み、「松籟邸」と名づけて住んだ景勝の地である。

さきの吉田翁の銅像は高さ二・四メートルのブロンズ像で、眼鏡をかけ袴をつけた和服の姿で、右手にステッキとして左手に葉巻をもった散歩姿の立像である。背後に秀麗富士、前方に相模湾、その向こうに対日講和条約締結の地サンフランシスコ、さらには首都ワシントンを見据えるように、吉田翁は立っている。

嘗て、作家の辻井喬氏は大磯の旧吉田邸について、家屋内の配置やまわりの景観を、爽やかな筆致で紹介している。

大磯・旧吉田邸は、西端に大きなガラスを嵌めたサン・ルームがあり、中にはブーゲンビリアや洋蘭や椰子を植えて寛げるように作ってあった。その後の、寝室に使われていた二階の窓からは、海を隔てて晴

れていると富士が見える。もつとも相模湾は玄関か

らサン・ルームに行く間の縁からも眺められたが、春には桜も軒を覆うようにして満開の花をつけた。

そして風景を眺めながら、晩年の吉田茂は自分の生涯を振り返り、明治以後の歴史の変遷と将来の日本の姿について思いを巡すことが多かったためではないか。（新潮45、昭62、8月号）

爛漫の桜花のもとで秀麗な富士の山容を仰ぎ、爽やかな松籟と潮騒の響のなかに、静思黙考して去来する国の姿をみつめる、晩年の吉田翁を辻井氏は描いている。とくに、晩年の吉田翁は玲瓏れいろう富士の山容に、憧憬の念をもっていた。翁の長男健一氏は、

父は富士が好きで、父がある所から西側のガラス戸越しに晴れた日には富士がよく見えることがそこを自分の居場所を選んだ理由ではないかと思ふ。曾てチャアチルに会って、日本に来られないのならせめて絵で富士を見せることを約束し、同じ大磯に住んでお出でになる安田鞞彦画伯にお願ひしてその絵を書いて戴き、そのうちの一枚をチャアチルに送ったことがある。……（新潮三文紳士 筑摩書房、昭和四九年八月三〇日刊、二三三頁）

と、吉田翁の日常生活における富士山の存在、富士山とおして、チャアチル卿との固い人間的な交流をもった

ことなどを語っている。

ところで、吉田翁は昭和二十九年九月二十九日に、欧米七カ国歴訪の旅行に出発、同年十一月十七日に帰国したが、その途中十月二十一日―二十八日の一週間に旧知のロンドンでは女王謁見、英国議会での日英関係についての演説、チャアチル首相主催の晩餐会出席などの行事を消化した。とくに、吉田翁はチャアチル卿に対する印象、英国人に対する印象を、『回想十年』の中に率直に述べている。

チャアチル首相のわれわれに対する歓待は、儀礼的形式的ではなく、全く親切のこもった心づかいであった。（略中）

しかし率直にいうと、私がこんどの旅行の途上にある頃の日英関係においては、主として経済方面のことではあるが、余り愉快ではない懸案や問題が残っていたので、英国へ乗り込むことは、公的には実のところ、それほど気が進まなかった。ところが、来て見ると、そこは英国人である。一旦友人となれば友情は友情、締ていほ炮ぱう恋れん々故人情、誠にうるわしい。

（回想十年 第一巻所収、「五、旧知多き英京へ」東京日川書院、昭和五七、二二―五三頁、二三三頁）
こうした温い印象をいただきながら、二十八日ロンドンを発つて、吉田翁はサザンプトン港からクイン・メリー

号で米国へ向つた。この時、クイン・メリー号の船上から大磯在住の安田鞆彦画伯宛に、書簡を送っている。

吉田茂記念
事業財団編 『吉田茂書翰』〔中央公論社、一九九
四年十二月二十五日刊〕 を見れば、つぎ
のような書簡が載っている。

拜啓、〔略前〕扱而小生共其後元気^ニ且つ愉快^ニ各国周遊
罷在、乍憚御放念可被下候、過日ロンドン首相邸招
宴の砌、チャーチル首相より、数十年前母君より日
本漫遊の話聞き、日本の事^ニ興味をもち分而富士
の秀麗世界^ニ冠たるを今^ニ聞覚居と申され、且今尚
画筆を揮^よ無上の楽しみ^ニ致居る由、甚た愉快気^ニ
語出られ、当夜ハ分けて好機嫌なりし由、小生より
ハ帰朝後我一流画伯^ニ依頼し富士の画を贈呈可致と
約し置候、就てもし御気分^ニ叶候得者大磯より眺め
たる富士を御書き願上度、もし又御差支も候得共何
人か御撰定被下御依頼願度、老首相ハ兼^ニ日本^ニ好
意を有せられ昨年皇太子殿下御渡英当時も礼を尽し
歓迎の意を表せられし由、是非^ニ我家の作を以而
其厚意^ニ酬度、宜敷御願申上候、小生共も十一月中
旬帰朝、其節拜晤を得て委細申陳候心得^ニ候得共、
不取敢此段願出候、〔略下〕〔七六七八頁〕

吉田翁にしては珍しく比較的長文の書簡をもつて、
チャーチル卿に贈呈するために、富士山の作画を安田画

伯に依頼している。

また、安田画伯宛の他の吉田書簡〔昭和二年二月二十八日付〕では、
先の書簡を敷衍して、チャーチル卿と画の贈呈を約束す
るに至つた経緯を申し送っている。

拜復 早速之御書難有拜読仕候、途中より申上候通、
英国^ニ英首相との口約も有之、是非^ニ御引受願敷、
全氏ハ兼^ニ日本之友人とし而好意を有せらる、人^ニ
有之、且つ今や画筆^ニ親む事唯一の楽しみとする旨
過日も語出られ、其幼時日本来游の母君より富士の
話を聞き訪日之上自ら筆^ニして見たしとの話より富
士の画を送る事^ニ相成候次第^ニ有之、先便そこまで
委しく申上候哉否や覚束かなく更^ニ願上候事^ニ候、
委細ハその内拜芝万縷の心得^ニ候、頓首

これまでの吉田翁の書簡から、チャーチル卿の富士山
に対する羨望の思いが伝わつたと思うが、吉田翁が白羽
の矢を立てた安田画伯自身は、これまで富士山を対象に
した画を描いたことがなかつたという。

評論家竹田道太郎氏に拠れば、安田画伯は昭和二十年
山中湖畔に疎開して二ヵ月余り、間近に見事な富士の山
容を朝夕凝視するうち富士山に魅せられ、昭和三十年秋
頃から漸く富士山を作画の対象に据えた。描いてみると、
他の題材にない魅力を、富士は豊富に持つていたという。

描く心、眺める気分によって、富士はどのようにでも表現できるのだ。また、富士は色で自由に感情を表わしてくれる。黎明を描けば清冽な気を漂わす。曙の姿には強さや知性さえ匂わせる。……

と、竹田氏は作家のこころを代弁しているが、安田画伯の富士の画には「観念ではない品格がある」と結んでいる。（竹田道太郎著「安田画伯」、中央公論美術出版一九八八年・一〇月二八日刊、一三〇頁）

また、昭和三十一年五月三十一日付西春彦氏宛吉田書翰の一節に、安田画伯が富士を描くに至った経緯を述べた箇処が見える。

尚又画は当地大磯在住の友人安田靉彦氏の作（マ）にて小生婦朝後直（マ）英国首相（マ）贈呈するものとの由来を申聞け依頼せるものにて、尔来年余自ら富士を種々の方面より実地視察研究の上書上げたるもの、初め氏ハ富士の研究不十分なれハ横山大観（マ）頼みくれとして固辞せるを小生よりたつて（マ）たのみたる結果研究を初め漸く昨今出来上りたる苦心の作（マ）云（マ）（吉田茂（マ）五頁七）

かくて、苦心の結果、安田画伯の富士の画は完成した。昭和（三十一）年四月四日付、安田画伯宛の吉田書簡には、

拝復 美事なる富士出来上り難有候、就て来る十日

英加両国大使招待披露仕度、当日午餐御都合被下御来会被下候得者望外之仕合（マ）候、先ハ御礼旁御案内まで、

匆々敬具

と、安田画伯へ招待状を送っている。その後、駐英大使西春彦氏に託して、吉田翁は安田画伯の画をチャーチル卿に贈った。先の昭和三十一年五月三十一日付、西氏宛の吉田翁書簡には、

拝啓 其後意外の御不沙汰愈々御仕剛奉賀候、扨而先年訪英の砌、Sir Winston Churchill氏（マ）富士山の画を贈ることを約束し五月初外ム省經由貴館（マ）送り置候、船は六月中旬着英と承知致候、何卒乍御手数全氏（マ）御贈呈被下度、全氏宛書面ハ多分貴館（マ）既送と存候、云々（四七五頁）

と、西駐英大使にチャーチル卿への贈呈を依頼している。また、昭和三十一年九月十七日付安田画伯宛の吉田書簡に拠れば、

拝啓 過日突然参上、却而失礼致候、先達英西（春彦）大使より来状、チャーチル前首相（マ）富士山額贈呈の次第詳細申参られ、次てチャーチル氏来翰送付越候（マ）付、不取敢差上候、全氏書簡の返事ハ外務省（マ）依頼起家可致候（マ）付、御序（マ）本文小磯拙宅へ御よこ

し願上候、先ハ右要用耳、書外ハ讓拜青候、敬具
(七七二頁。)

と、チャーチル卿のもとに画が無事届いた旨を報告している。また、西春彦氏の著書『わが外交と随筆』(ロサンゼルスエイトツ昭和六〇年四月二九日刊)の口絵に、ロンドン郊外のチャートウエルに、西大使がチャーチル卿を訪ね吉田翁から託された画を、卿に贈呈している写真が載っている。

さきの竹田氏の書物には、安田画伯から聞いた話として、吉田翁にまつわる富士山の話が載っている。吉田翁の晩年に、側近の政治家たちが集って、翁に何か贈物をしようという話になって、翁の意向を聞いたところ、安田画伯の画が欲しいということ、福永建司氏が画伯に作画の依頼に訪れた。しかし、生憎仕事一杯であったため、画伯が断ると、福永氏は困惑の態であったので、以前「吉田さんに頼まれて、五賢堂から眺めた富士を描く約束があるが、まだ果してないので、その方にそれを廻しましょう」と約束したものの、安田画伯描けずにいたという。

偶々、吉田翁は安田画伯に「約束の絵はどうした」と問われた。それから画伯は、

さすがに何とかしなければと思うようになり、それにも虫も知らせたのか、そろそろと思って、(略中)大磯

のロング・ビーチホテル(当時、大磯ブ)の富士を遠望できる部屋から少し写生をした。その翌日は吉田邸に行つて庭の方に入ると、顔見知りの秘書が出て来て、申し訳けないが、今日は取り込み中なので、いい難そうに頭を下げるので、妙な気持で家に戻り、暫くしてテレビで翁の計を知って驚愕したそう、
「私がロング・ビーチで富士を描いている頃と吉田さんが最後に富士を見たといわれた時間とどうも同じ位だったらしい」(二四九頁)
と、安田画伯の語つた回顧談が載っている。まことに奇縁である。

元国連大使加瀬俊一氏は、『吉田茂の遺書』(讀賣新聞社、昭和四二年二月刊)の中に、吉田翁との永別をこう記している。

私は例年のように、「吉田翁の」誕生日の前日に大磯を訪ね、水入らずで歓談し、思ったよりも元気なので安心したのだが、辞去する時には、黄昏たそがれの富士が残照を浴びて、莊嚴に輝いていた。

「ああ、これが吉田さんだ」と思って、しばしみとれていると、見送りに立った老主人は、私と肩を並べ

「いつ見てもいいね。また、見に来て下さい」と優しく言つた。その時の、ひと懐なごこい微笑は、

いまなお私の眼底にあざやかに残っている。

聞けば、死の前日、故人は

「富士山を見たい」

と言つて、ベットのうえにすわり、晴天にそびえ立つ美しい山容に飽かずながめ入った、という。その富士はいま暗夜に姿を没し、その人は既に亡い。淋しい限りである。

※

吉田翁の没後五年を経て、安田画伯は画中に五賢堂（のちに七賢堂）を描き、「富士晴るる」と題した作品を完成して、翁の霊前に供えた。のちに「富士秋霽」と改題して、第二七回春の院展に出品している。（重田哲三氏の「先生との歴談の中か」参照）

最近、吉田翁の高潔な志操と、その名声は一段と高い評価を得ている。加瀬俊一氏は翁の孤芳を、こう述べている。

「山中流泉」と題する美しい唐詩がある。山のなかを泉を流れているが、その名をきいても知る人はない。ただ、日夜流れ続けるのである。

恬淡、人ノ見ルナク

年々、オノズカラ清シ

と結んでいる。

（日本文芸社版「吉田茂の遺言」参照）

まことに、「故人の風姿」を偲ぶに相応しい至言である。

〔研究余滴〕

吉田茂のことば

とくに明治の指導者たちはすぐれた「勘」をもっていた。だから私は事あるごとに「勘」の必要を説いてきたのである。しかし、「勘」というものは幸運と同じように、つくり出そうとしてつくり出せるものではない。それらはともに、すぐれた歴史の感覚をもち、勤勉に働く国民に与えられる一種の贈り物のようなものである。自分たちの成功に酔ったり、実力を過信する人びとには、幸運も「勘」も与えられはしないのである。日本の歴史もそのことを示している。

吉田茂著『日本を決定した百年』（三頁）より

（元水府明德会彰考館副館長）